

M 谷氏邸訪問記(2014.3.12)

1. はじめに

M 谷氏は12年来のオーディオ仲間です。最近熱心にPCオーディオに取り組んでおられます。訪問の目的は同行のA氏、S氏、Y氏とともに氏のDSD native再生の現状について教えを乞い、また試聴させていただくことでした。

2. M 谷邸のシステムの概要

スピーカーはアルニコのJBL4343WXで低音はCROWN D-45、中高音は上杉アンプUBROS-14(EL34pp)で駆動されています。入力ソースは、UBROS-14とペアーとなる上杉プリのUBROS-12はお休みで、A&H XONE:62のミキサーを経て、プロ仕様のエンハンサーであるソニックマキシマイザーと称するBBE 882iを経由し、BEHRINGERのチャンネルデバイダーCX2310 Super-X Proでチャンネルを分けて上記のアンプでマルチアンプ駆動されています。BBE 882iは好みによってバイパスもできます。

入力系はDENONのDL-103を装着したYAMAHAのGT-2000、CECのTL3NなどでアナログやCDも聴かれますが、最近主にPC-オーディオを聴いておられ、44.1KHz PCM入力とDSD Native再生ではUSB-DACのSV-192SにMUTEC MC-3からクロック供給を行い、PCM再生では44.1KHz PCM入力後のアップサンプリングも可能です。さらにハイレゾPCM再生用にM2TEC HiFace EVO CLOCKからクロック入力を行うM2TEC USB-DDCのHiFace EVOを使用され、S/PDIF出力をSV-192Sに入力されています。

再生ソフトはfoobar2000にASIO 4 ALLをプラグインされ、さらにオーディオ仲間のF氏作成のWASAPI対応 Exclusive Playerも使用されています。





左上：4343WX、GT-2000、TL3N、UBROS-12 など
右上：UBROS-14、A&H XONE:62、MC-3、HiFace EVO
CLOCK、HiFace EVO、SV-192S、CX2310 Super-X Pro、
BBE 882i、CROWN D-45 など
下：foobar2000 画面

3. 試聴の経過

まずは、SV-192S で既存 DSD 音源の再生と PCM 音源からリアルタイム変換での DSD 再生を聴かせていただきました。DSD は主に DIFF, 2.8MHz のフォーマットで再生しておられるとのことでした。次に 192KHz WAV 音源を HiFace EVO で聴かせていただきました。M 谷氏によれば既存 DSD 音源に飽き足らず、DSD の可能性に期待はしていなかったそうですが、PCM 音源からリアルタイム変換して DSD 再生を行って見たところ、低音の出方など DSD の良い面が分かってきたとのことでした。また、クロックの入る CEC のトランスポートに関しては、現時点では CD 再生よりリップリングして PC オーディオによる再生に分があるとのことでした。

上記のようにプロ用機器を駆使しての PC オーディオによる M 谷サウンドは、低域が引き締まり、抜けがよく切れ味の鋭い音で、JBL4343 の中域が厚く、低域が膨らみがちな音を予想する向きには驚きだと思います。

ここで Y 氏から、録音の時点で決まってしまう、あるいは CD のフォーマットにいったん入ってしまった PCM 音源を後からハイレゾにしても DSD にしてもデータ量からすれば変わるはずがなく、意味がないのではないかという問題提起がありました。そこで、Y 氏が CD からリップリングされた 44.1KHz, 16bit WAV を AudioGate により 192KHz, 24bit WAV と DIFF, 2.8MHz に変換し、3 者を比較試聴する実験を行いました。当方の耳には 44.1KHz, 16bit WAV→192KHz, 24bit WAV→DIFF, 2.8MHz の順にソフトな女性ボーカルの囁くような声により耳に近づいてくる印象でしたが、Y 氏は DSD の可能性を感じながらも、自宅でじっくり比較してみたいとのことでした。

この後、持参したネットブックの Vista 機から A 氏が持参した MYTEK DIGITAL 192-DSD のドライバーを必要としない USB1.1 入力により AudioGate3 で DIFF, 2.8MHz から 96KHz PCM にリアルタイム変換したり、M 谷氏の PC から WMP で 96KHz PCM で再生したりして MYTEK DIGITAL 192-DSD の音を聴きましたが、違和感なく M 谷サウンドの中に収まりました。なお、ネットブックで DSF, 5.6MHz から 96KHz PCM にリアルタイム変換すると音切れが起きましたが、これは旧型の Vista 機的能力不足に由来するものであり、M 谷氏の PC で Exclusive Player による再生が不調であったことは WASAPI 対応の設定ができていなかったものと思われま

すが、時間の関係で十分に検証ができず上記の音出しができたことの報告に留めておきます。

この他、電源は 200V からステップダウントランスを経ていること、ルームチューニングや振動対策をきめ細かく行っておられること、USB ケーブルもバスパワーを切って電池による供給とする自作ケーブルとしていること、Hiface EVO CLOCK も電池駆動としていることなど、プロ用機器を駆使する大技から、こういったこまめな小技までの対策がスカッと抜けのよい M 谷サウンドの隠れた秘密と言えましょう。

4. まとめ

M 谷邸のシステムは PC オーディオを使いこなされ、主にポップス、ラテン、ジャズを対象とした音楽ジャンルとそれに対する機器の選択や再生ソフトの選び方等のストラテジーがうまくマッチしていました。また、持ち込んだ MYTEK DIGITAL 192-DSD や KORG の AudioGate3 による再生はぶっつけ本番でも M 谷邸のシステムに音質的に溶け込んでいましたので、MYTEK DIGITAL 192-DSD のドライバーをインストールすると、さらにその可能性が広がると思われます。

以上